Phonetic Society of Japan

音声研究　第16巻第1号
2012(平成24)年4月
119–133頁

Journal of the Phonetic Society
of Japan, Vol. 16 No. 1
April 2012, pp. 119–133

特集論文

屋久島の二型アクセント
—自発談話音声資料の韻律分析—

児　玉　　望*

Two-pattern Accent Systems in Yakushima: Prosodic Analysis Based on Corpora of Spontaneous Speech

Nozomi KODAMA*

SUMMARY: In this study, contrastive tones in six dialects of Japanese spoken in Yakushima are analysed as lexical tone systems in which either of the two distinctive tone contours realizes an accentual phrase according to the tonal feature of the initial word of the phrase. Given that spontaneous speech data are available for analysis, a special focus of this study is the presence of the right edge tones in both contours in five out of the six dialects, a feature shared by the Kagoshima and Tanegashima dialects. A tentative reconstruction of the three lineages is presented on the assumption that the characteristic LHL on the left edge of the type A contour in Yakushima is an innovation rather than a case of retention.

キーワード：二型アクセント，屋久島，アクセント史，語声調，宮之浦方言

1. 概要

鹿児島県屋久島の方言のうち，永田，宮之浦，楠川，安房里，尾之間，栗生の6方言を，自発談話音声資料に基づいて語声調的な（アクセントの位置の固定しない）型の対立をもつ二型アクセントとして分析し，同様な類型に属する鹿児島県本土及び種子島の二型アクセントとの系統分岐に関する仮説を提示する。

2. 先行研究

屋久島諸方言は，九州西南部の二型アクセントの成立との関係で早くから注意が向けられてきた。特に，注目されたのが宮之浦方言である。2音節名詞の類別語彙の分布では，九州西南部の二型アクセントは第1類・第2類が平山輝男氏のA型，第3類～第5類がB型に対応する。金田一春彦（1954）の九州アクセントの系統分類は，九州西南部の方言の多くに，B型文節で「直後に〈ア

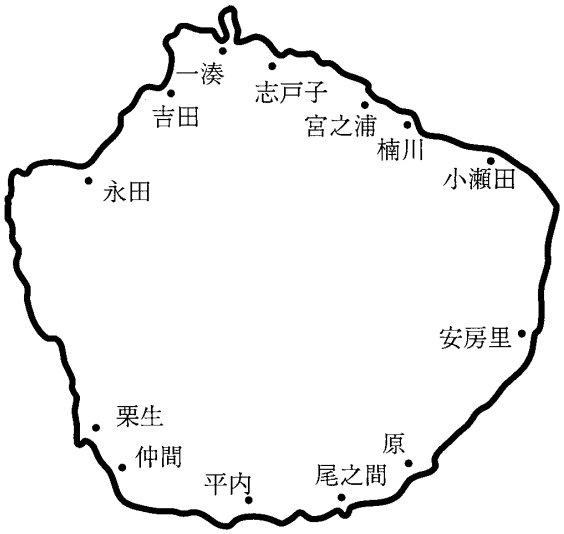

図1　屋久島

* 熊本大学文学部教授（Professor, Faculty of Letters, Kumamoto University）

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

クセントの瀧〉があり」助詞が接続すると「高」が助詞に移動するのに対し，宮之浦方言ではB型で助詞が低接し名詞側の「高」が動かない点に着目し，これを九州西南部他方言の「高」が移動する型の先行段階と推定して，これらの型と，同様の「高」の移動があるが〈アクセントの瀧〉を欠く京阪式アクセント（2音節名詞第4類）との直接の関係を否定した。

(1) 2音節名詞[1)]

鹿児島	A型	[○]○	○[○]▽
	B型	○[○]	○○[▽
宮之浦	A型	[○]○	[○]○▽
	B型	○[○]	○[○]▽

1音節や3音節以上の名詞や動詞を含む屋久島多地点のアクセント報告としては，上村孝二（1966），平山輝男（1969），木部暢子（2000）があるが，いずれも宮之浦方言のB型で1音節の助詞が接続した場合に助詞が低接することが記述されている。

(2) 先行研究と調査地点

上村（1966）永田，一湊，宮之浦，安房，尾之間，平内，栗生

平山（1969）一湊，宮之浦，小瀬田，尾之間

木部（2000）永田，吉田，一湊，志戸子，宮之浦，原，尾之間，平内，仲間，栗生

(3) 3音節名詞

鹿児島	A型	○[○]○	○○[○]▽
	B型	○○[○	○○○[▽
宮之浦	A型	[○]○○	[○]○○▽
	B型	○○[○	○○[○]▽

(4) 尾之間方言の分析例

上村（1966）

A型	[○]○	[○]○▽～○[○]▽
B型	○[○	○○[▽
A型	○[○]○～[○]○○(希)	○[○]○▽
B型	○○[○	○○○[▽

平山（1969）

A型	[○]○	○[○]▽
B型	○[○	○[○▽
A型	○[○]○	○[○]○▽
B型	○[○○	○[○○▽

木部（2000）

A型	[○]○	○[○]▽
B型	○[○	○○[▽
A型	○[○]○	○[○]○▽
B型	○○[○	○○○[▽

これらの研究は，一型化している平内方言を除きこれらの方言がすべて鹿児島方言と同系の二型アクセントであるという分析のほかに，宮之浦方言ではA型でも助詞の接続により名詞側のアクセントが動かないことに着目し，A型・B型のいずれの型でも助詞接続により「高」の移動する鹿児島方言や，B型やA型の一部のみで移動する屋久島の他方言との間の史的関係を論じている点が共通する。

(5) 先行研究の系統仮説

上村（1966）鹿児島方言を祖形とし，アクセントが移動しなくなる方向

平山（1969）九州東北部方言から宮之浦方言を経てアクセントが移動する方向

木部（2000）1音節名詞の弁別喪失で分岐，それぞれ「固定型」から「移動型」へ

1音節名詞とそれに助詞が接続した形で型の弁別がないという報告があるのは，宮之浦，安房，尾之間，仲間，栗生の各方言である。

これらの研究にもうひとつ共通するのが，宮之浦方言における，B型で助詞がついた場合の実現形の揺れへの言及である。つまり，宮之浦方言で

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

もB型で1音節の助詞が接続した場合に助詞の側に「高」が移動する発話が観察されているのであるが，この分布の判断は論者によって異なる。上野善道（1984, pp.172–173）は，この宮之浦方言の揺れを取り上げ，二型アクセントでありながらN型アクセントの一般特性を満たさない体系と鹿児島方言のような「真性二型アクセント」体系との間の揺れとして，類型変化のプロセスの手がかりとなりうるかもしれないと示唆する。

3. 談話音声資料による分析

3.1 問題の所在

これらの先行研究から，明らかにすべきであると考えられる問題は3つある。

(a) 宮之浦方言B型のアクセントの単位は「単語」か「文節」か。

(b) 屋久島諸方言A型は，「文節頭部固定型」であってB型や鹿児島方言A型の「文節末部固定型」とは異なるといってよいか。

(c) 先行研究で確認される「揺れ」をどう説明するか。

(a) については，1音節助詞だけではなく，他の助詞や助詞連続が名詞に接続する場合のデータを補完して分析する必要がある。(b) は，上野（1984）で（真性）N型アクセントの特徴として挙げられている「文節表示機能」との関係で重要である。「文節頭部固定」と「文節末部固定」が混在する体系では，「文節頭部固定」と「文節末部固定」の文節がこの順で連続する場合に（のみ）文節境界がアクセントによっては明示されないことが予想される。この点を確認できるような連文節のデータがない。

調査票調査ではなく談話音声資料を用いたのは，(b) と (c) の問題のためである。二型アクセントであること，語の型所属など文節以下のレヴェルに関しては先行研究の分析にほぼ依存して資料を解釈した。(b) を明らかにするための連文節調査は，調査票調査も可能であるが，連文節のイントネーションの斉一性を確保するための工夫が必要となるなど，文脈によってイントネーション的環境を推定できる自発談話と比べて調査票調査が効率的であるとは必ずしもいえない。また，ある方言に特に条件付けのない自由変異としての揺れがある場合には，談話音声資料のほうが容易にそれを確認できる。この種の揺れは，屋久島諸方言が「語声調」であるならばその特徴として予想されうると考えた。この点について，吹上町方言についての記述分析である上野（1992, p.110）で記述された，鹿児島方言とも共通のA型アクセントの実現の揺れを例に説明する。

(6) ハネ[ムーン]]〜ハ[ネ]ムーン　ハネ[ムーン]ガ（上野 1992，例 42）

A型文節の末音節が下降調になるのは，この「3モーラ」音節の揺れと，文節が音節の長さに関わらず1音節のときである。これは，「語声調」としての鹿児島方言アクセントのA型で「固定」しているのはH（高）とL（低）の声調が文節末にこの順で現われることであり，それが末音節内で完結して下降調（HL）として実現するか，次末音節の高平調（H）と末音節の低（L）として2音節にわたって実現するかは，文節の音節構造によって決定され，「3モーラ」末音節をもつ多音節文節はこの両方が可能な場合に相当する，と分析できる。宮之浦方言で観察される揺れも，この種の声調の音節分布の違いによる揺れとして説明できることを次節で詳述する。

また，早田（1985, pp.7–9）では，位置のアクセントとしては有意味でない下降調を含む同一の音声データに対し下降位置の判断が揺れることの説明として，「語声調的」な博多方言の話者がこの下降調に反応した可能性があるとしている。これが正しいとすれば，「位置」の判断に揺れがあるような語声調方言のデータでは，ピッチ曲線が有意味でないか，ピッチ分析で検証する必要があることになろう。

以上の観点から，談話資料を用い，長い文節を中心とした先行研究の分析から予想される実現形

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

の確認，対訳を参照して川上秦氏の「句」に対応すると考えられる連文節構造での文節境界の分析，談話中の頻出語彙について揺れの有無の確認，揺れがある場合のピッチ曲線の確認を中心とする分析を行なった。

3.2 宮之浦方言の分析例

宮之浦方言の資料として用いたのは，日本放送協会が全国方言資料の一環として公刊した10分程度の録音である。全国方言資料カセットテープ版をPCM音源にデジタル化したものを用い，Praatによるピッチを中心とした波形分析を行なった。

3.2.1 A型文節頭

宮之浦方言の多音節語A型が「頭高型」である，という先行研究に共通する分析は，資料でほぼ確認することができるが，後述するように例外もある。句頭位置[2]での波形分析では，この頭音節が短い場合でも一貫して上昇調が観察される。これは東京方言の句頭の頭高型名詞で観察されるもの（早田輝洋1999，川上秦1984）と似ている。

頭音節が長音節である場合の記述は，先行研究によって下降調とするものと高平調とするものがある。資料では，下降調に聞こえる例はなく，全体が「高」に聞こえるが，波形は上昇調になっている。東京方言で「語頭に長音節が来た場合は，主観的には語頭の「低」はないように聞こえる（早田1999, p.268）」とされる場合と同様である。

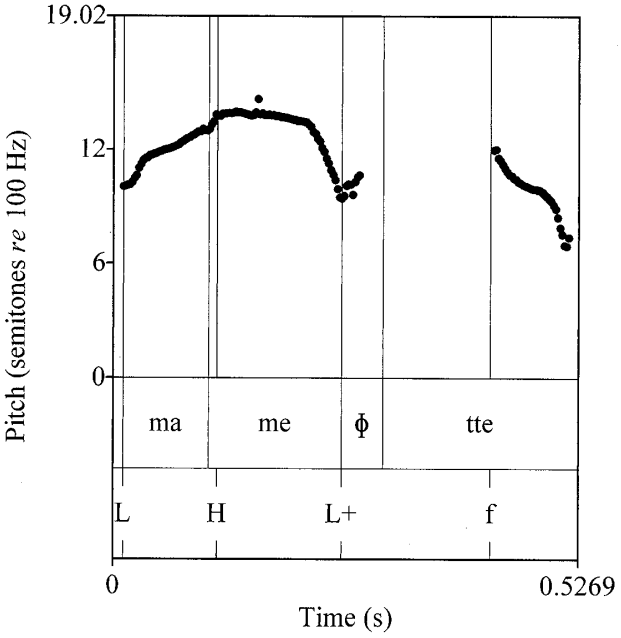

図2 [[マ]メ]フッ]テ「まみれて」自由会話1 52"

頭音節の上昇調（LH）は音節の長さに関わらないが，Hからの下降はLHの長さにより異なる。頭音節が短いと次音節のHが維持され，次音節が短く後続音節があれば3音節目で下降（LH-H-L），そうでなければ次音節内の下降調となる（LH-HL）。頭音節が長いと次音節冒頭から下降する（LH-L）。いずれも頭高であるが，頭音節が短い場合は次音節も高いため，音節数が多い文節では頭2拍が高い印象となる。

A型が頭高にならない場合は，平山（1969）に頭音節が無声拍の場合，次音節が短ければ「高」，長ければ「高低」の記述がある。この実例は，資料にも多い。

(7) キ[コ]ゴ]タ　「聞きたくは」
（自由会話1）
ヒ[ト]ナ]ミ　「人並みに」
（自由会話2）
フ[タイ]]ナ]ガ　「二人ながら」
（あいさつ8　祝儀）
シ[コー]]タ　「作った」
（あいさつ6　送り）

以上の例から宮之浦方言A型の文節頭に固定していると仮定される声調連続は，LHLである。頭音節全体が有声であれば，音節の長さに関わらずLHはこの音節内に上昇調として実現し，「高」と聞かれる。頭音節が無声の場合，この音節はLとなり，次音節が短くかつ全体で3音節以上の長さがあればL-H-Lと3音節にわたって，そうでなければL-HLの2音節で，LHLが実現する。

頭高に聞こえない以下の語例は，いずれもLHLの実現形と解釈できる例である。

(8) トッ[ビョー]]トイ]]「トビウオ獲り」
（自由会話2）

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

アッ[キェ]]ハテ]テ　「あきれ果てて」
（自由会話1）
cf. [[タッ]ツ]ケ　「たきつけ」
（あいさつ6　迎え）

頭音節が促音を含む場合も波形に上昇調はあるが，高い部分が消えかつ次音節に下降調があると，L-HLと解釈できるピッチ形となる。次音節が無声なら頭高型である。

(9) ハ[タッ]カ]タ　「働き方」
（あいさつ3　道で）
ア[ガッ]ドコイ]ジャ
「上がるどころでは[3)]」
（自由会話2）

次音節が後半に促音を含む場合，次音節は下降調を取るが，低い部分が無声となり，聴覚的には頭音節より次音節の有声部分が高く聞こえる。

A型が頭高に聞こえない場合にイントネーションが関与する場合もある。重複型オノマトペには反復部でピッチ下降のある型とない型がみられるが，反復直前の音節の母音が長母音化した語形では，頭音節が短い場合には次音節が長い高平調で実現し，長い1音節の重複では，前半が高平ではなくはっきりした上昇調に聞こえる音形で現れる。この型も，冒頭部へのLHLとして，A型の実現の一種とみなすことができる。

(10) ベ[チャー]グヮ]チャ　（自由会話1）
[[ドーン]ロン]]　（自由会話1）
cf. ブラーブ]ラ（自由会話1）

3.2.2　B型文節末

資料の自由会話1「雨と日照り」には，B型2音節のアメ「雨」の語例が頻出し揺れが観察できる。アクセントの単位としては2音節単独での出現，3音節以上の文節での出現形に分けられる。前者では安定して「低・高」に聞こえるが，後者では，文節末の1音節（すべて助詞）だけが「低」となるものと文節末音節（助詞ノ，ト，ニ，コソ）までこの「低」が現われないものに分かれる。ただし，波形をみると後続文節が低く開始されるもの以外でも音節末にピッチ下降があるものが多い。たとえば，アメ]アメ]アメ]]「雨，雨，雨」の連呼では，最後のメでも音節末に鋭い下降曲線が現われる。

このことから，B型文節末の固定した声調連続はHLであると考える。2音節のB型文節ではこのHLは音節の長さに関わらず次音節内に現われ「高」と聞かれる。3音節以上のB型文節では，次末音節Hと末音節Lの2音節にわたって実現するか，末音節内での下降調として実現するかの間での揺れがあると仮定すればB型文節語例の末音節ピッチはほぼ説明できる。文節が付属語を含む場合も含まない場合も，「低」は1音節以内であり，この文節末音節が長い場合には，下降調が聞きとれる場合と音節全体が「低」に聞こえる場合とがある。

(11) ヨナ]カ　「夜中」　（自由会話2）
フロレ]モ　「風呂でも」
（あいさつ6　迎え）
トーシカー]]　「年から」
（あいさつ7　不祝儀）
ナナジューエン]]（スッ）
「七十円（する）」
（あいさつ4　買物）
オヤコナ]ガー　「親子ながら」
（あいさつ8　祝儀）

2音節のB型文節は○[○で揺れがなく，○]○に聞こえる2音節A型と弁別されるが，A型LH-(H)L，B型L-HLと表記できるこの対立は，ピークとしてのHの位置の対立であって，文節頭からHまでが上昇調，Hから文節末までが下降調となる点は共通である。3音節以上の文節ではA型のHが頭音節末よりは後ろにないため，B型のHの位置の揺れ幅は大きくてよいが，この揺れは，ピッチ下降開始が文節末のどの位置で開始するか，と

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

いう，連続的な変異であり，末音節が「高」か「低」かの二者択一ではない。逆に，1音節の文節ではこの音節内でのLHL（上昇下降調）で下降開始位置による弁別が不可能，と考えれば宮之浦方言で1音節文節で型の弁別がないことの説明がつく。

3.2.3 文節声調

宮之浦方言の文節は，A型・B型とも，上昇調ではじまりピークに達して下降調で終わる，という型を持っている。ピークがA型では文節頭，B型では文節末の近傍にあり，文節の音節数が増えると，A型では下降，B型では上昇の曲線が延びる。A型の下降曲線は，LHに後続する部分が2音節を超えると，(L)HLの急激な下降と文節末の1音節の下降の間に下降の緩い部分が続く，という二段下降となる。たとえば，[[オー]ソーロー]デ「大騒動で」（自由会話1）では，ソーローではほとんど下降が聞き取れないが，下降曲線が急な末音節デは低く聞こえる。長い末音節の下降調は知覚可能である。B型の上昇曲線は，文節が長いとHの卓立が目立たない多音節上昇で，たとえばタンゴノミール]ヲ「桶の水を」（自由会話1）では頭音節の上昇調は聞き取れるものの徐々に上昇が緩やかになって末音節で下降に転じるピッチ形が現れる。

連文節構造では後続文節のアクセントの上昇調が抑制され，下降開始まで平板なピッチとなる「アクセントの弱化」がしばしば観察される。弱化した文節との境界は，前部文節末の下降調からのピッチ下降の停止として聴覚的に判別できる。A型の先行文節は，末音節前後で2段のピッチ差が聞き取れる。B型の先行文節では，Hが文節終端に近いと，この位置から次文節冒頭まで続く急な下降が，金田一（1954）の〈アクセントの瀧〉（“}”で表記）のように聞こえ，末音節のLが聞き取れない場合がある。

(12) [[サバ]ツイ]](A) イグ]ニ(A)
「鯖釣りに行くのに」　（自由会話2）
[[ノム}(B) ミル]ガ(A)
「飲む水が」　（自由会話1）
[[ナー]コゴ]タ(A) アッテ]モ(B)
「泣きたくても」　（自由会話2）
ヨカドコイジャ]](B) ナカッタ]](B)
「よかったどころじゃなかった」
（あいさつ8　祝儀）

3.2.4 まとめ

談話音声資料の聞き取りにより，3章冒頭の問題点は，ほぼ結論を出すことができる。

(a) 宮之浦方言B型のアクセントの単位は「文節」である。

(b) 宮之浦方言A型は，「文節頭部固定型」であるが，文節末にも1音節以内の下降調があり，文節両端固定型ともみることができる。A型・B型とも助詞の接続などで移動するピッチ配列がある，ということから，鹿児島方言と同様に「真性二型アクセント」とみなすことができる。

(c) 先行研究に共通して助詞付きのB型文節で報告される揺れは，談話資料でも同一の話者の近接した発話で確認できるが，ピッチの分析から，B型文節末のHLの音節配分のずれによって生じていると考えてよい。先行研究で揺れの報告のない助詞のないB型文節でも3音節以上のものに同様の原因によるとみられる揺れが確認できる。先行研究で揺れが報告されていないのは，助詞付きの語例が連文節環境のデータを基にしているのに対し，助詞のない語例が単語調査のみによっているためではないかと推測する。

声調配列の固定した語声調を文節アクセントに仮定することにより，音節数に関わらず一貫して頭高型が現れる宮之浦方言A型と，他の屋久島諸方言の2音節目あるいは2モーラ目に固定した「高」をもつA型は，ともにLHという声調配列をもっており，頭音節が短い場合にLHが，頭音節内で上昇調として実現しうるか2音節を要するかの音節への配分が違うとみることができる。屋久島諸方言でおきたアクセント変化を，このよう

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

な語声調とその音節配分の変化として見直すことにより，「類型変化」による説明に代わる系統史を組み立て直すことが第4の課題となる。

4. 屋久島諸方言のアクセント

鹿児島県立図書館では，方言ライブラリとして県内88市町村で1972年から1986年までに収録した方言談話音声を公開している[4]が，上屋久町と屋久町（現屋久島町）の方言テープは22本に及び，上屋久町楠川，永田，屋久町安房里，尾之間，栗生の5地点のものを含む。楠川以外は先行研究の記述がある。これらの5方言について，音声資料をPCM音源にデジタル化したものを，宮之浦方言と同様の観点から分析する。

断定の助動詞ヤ～ジャは鹿児島方言でB型の「独立する付属語」であり，「文節」が2アクセント単位に分割されるが，屋久島の二型アクセントでも助詞の接続とは異なる実現形になっていることが上村（1966, p.57）の補足例にみえ，助動詞ヤがA型二拍語接続でL，B型二拍語接続でHとピッチを変える方言があることがわかる。屋久島方言でもヤが文節として独立する付属語であるならば，先行二拍語単位の型の弁別が後続する単位の冒頭に実現する例，ということになる。同様の例は，特に短い先行文節に後続する位置で，断定の助動詞以外の独立する付属語を含む文節でも聞かれる。このような短い文節が発話の中でどのように実現しているかに関しても注意する。

文節を特徴付けるピッチ形の音韻表記は，H・Lの2つのレジスターの配列を基本とした。文節頭あるいは文節末の固定した配列はH, Lで，文節の長さに応じて音節数が可変である部分でのH, Lの連続については，H+, L+で表記した。平進のH+に先行する上昇と後続する下降はLH+, H+Lであるが，これに対して低い平進のL+に先行する上昇と後続する下降は，rL+とL+fで表記する。一方，宮之浦方言のB型のように，可変部全体として多音節の上昇調となる場合には，“<”を用いてL<Hと表記する。

(13) 宮之浦方言の語声調
　A型：LHL+f
　B型：L<HL

文節連続におけるH, Lを超えたピッチ変化の記述に，以下の2種の記号を用いる。

(i) 文節境界声調：}（ピッチ下降），
　　{（ピッチ上昇）

文節単独での言い切りで実現せず，複数の文節が連続して発話される環境でのみ確認できるようなピッチ変化である。金田一（1954）の〈アクセントの瀧〉は，}に相当する。

(ii) アクセントの弱化：!H

句切りのない連続した発話で，宮之浦方言の2番目以降の文節では，Hへのピッチ上昇の非実現と分析できるピッチパターンが現われ，L<!Hでの上昇が制限され，低平調に聞こえる音形で実現する。これに対し，後続音節への下降は聞き取れる場合が多いことから，このような上昇のみの抑制を，Hの表記を残して!Hと表記する。

語例の出典は，方言ライブラリがCD-R化しているテープについてはその資料（県立図書館での「市町村番号 - テープ分類番号」形式のテープ分類と，テープごとのCDが2枚にわたるときはその番号，CD-Rのトラックナンバー#）での開始位置の時間を示した。CD-R化されていないテープはトラックナンバーではなくA, B（面）で表記した。

4.1 楠川方言

屋久島北東部の海岸線のほぼ中央に位置し，西に隣接して宮之浦集落がある。方言ライブラリのテープ（82-1）に収録された談話は県立図書館長をまじえての楠川方言語彙や楠川の過去に関する回顧である。この方言の二型は次のように分析できる。

(14) 楠川方言の語声調
　A型：LHL+(f), LH}
　B型：LH+(L)}, LH{

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

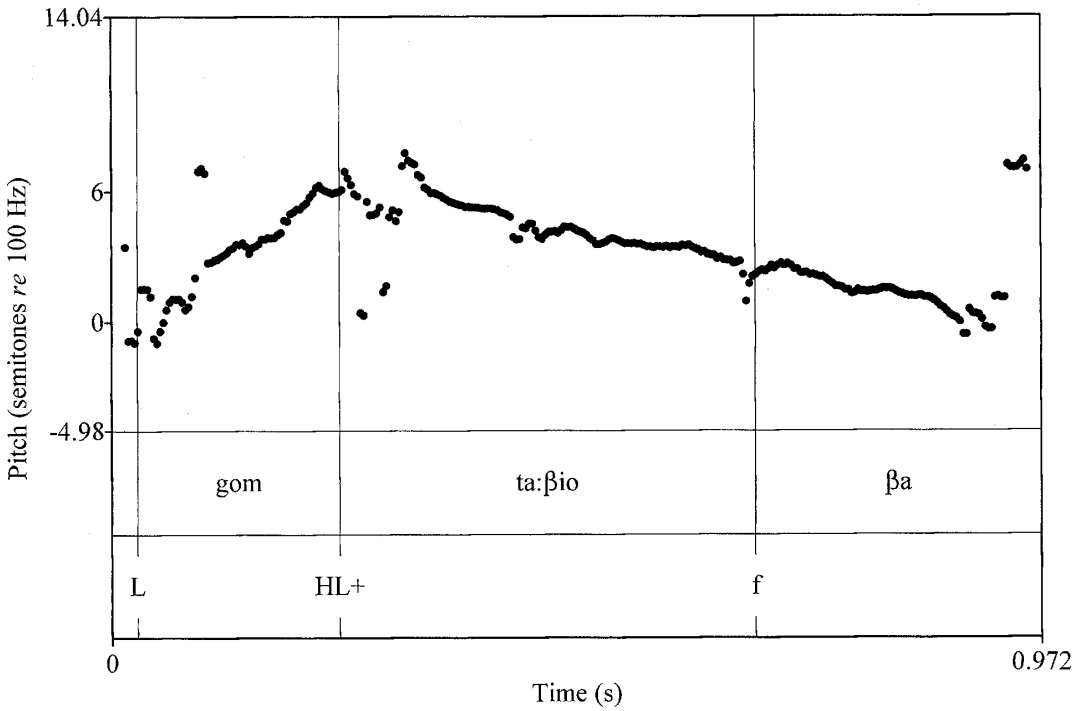

図3（楠川方言）　ゴ[ム]タービオ]バ「地下足袋を」(82-1 #2 17'40")

A型・B型で共に，文節頭固定のLHのピッチ上昇が現われる。このLHは，頭音節が，全体が有声の長い音節であればこの音節の上昇調として実現するのに対し，短い音節や促音に終わり無声部をもつ長い音節では，Hの実現は2音節目の冒頭となり，この2音節目が無声拍の場合はHの実現が3音節目となる。

A型では，この上昇のあとでただちにピッチが下降する。LHに続く下降は，文節頭が有声の長音節のときは次音節のL，それ以外では，二音節目が有声の長音節ならば下降調として，短い場合や促音に終わる長音節ならば三音節目のLとして現われる。文節がこれより長いと，複数の音節にわたるゆるやかな下降で低平調に聞こえるL+が続く。B型はLHの直後の積極的な下降を欠くことでA型と区別される。文節末までHを平進で維持し文節末の卓立がないことが特徴的な方言である。

連文節構造では，先行文節末の境界声調がA型・B型共にあり文節境界が知覚できる。A型の境界声調は，宮之浦方言に似た二段下降fとして文節末音節に実現する。

(15) ゴ[ム]タービナン]ダ　「地下足袋などは」
(82-1 #2 17'32")

B型先行文節では，境界声調}による音節境界でのピッチ下降に先立つ先行文節末音節頭から下降が開始し末音節の前後で2回の段差が知覚できる場合がある。

(16) [クイモ}ナアンヨー]ナ
「食うことも（B）できないような（B）」
(82-1 #1 44'43")
ミ[ヨッ]タ}トコイ]]ガ
「見ていた（B）ところ（A）」
(82-1 #1 15'47")
ヤ[マ]ニ}ハイル}トキャ
「山に（B）入る（B）ときは（B）」
(82-1 #2 14'41")
イ[マ]ノ}スンポーデ
「今の（B）寸法で（B）」　(82-1 #1 21'26")

声調実現のタイミングによる揺れはこの方言でも観察される。(17) はA型文節頭のLHが2音

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

節にわたる上昇調からの下降が遅く3音節目までが高く聞こえる例である。

(17) ツ[ミダ]シヨッ]タ
「積み出していた」 (82-1 #1 29'15")
ア[タイド]ガ
「私どもが」 (82-1 #2 8'54")

B型文節末音節では，比較的長い文節を中心にLが出現することがある。宮之浦方言のように一貫してLが観察されるわけではないので，連文節構造では必ず音声的に実現する境界声調}（任意に先行文節末音節から開始）が，変異形として連文節構造以外の位置で任意に末音節下降として実現している，と解釈する。

(18) ワ[タオ]バ 「腸を」 (82-1 #2 13'45")
イ[ロイ]ロ 「いろいろ」 (82-1 #1 6'51")
[[オンナシヨー]ナ 「同じような」 (82-1 #1 8'41")
[[サンニンバ]カイ 「三人ばかり」 (82-1 #2 18'29")

連文節のアクセント境界が任意に削除されて1アクセント単位に統合したと分析できる構造[5]でも末尾のLが観察されることがある。

(19) オ[ケンナカ]デ
「桶の（B）中で（~~B~~）」 (82-1 #1 43'35")
ヒ[ラケテナ]カ
「ひらけて（B）ない（~~B~~）」 (82-1 #1 14'23")
ム[ギノアト]ニ
「麦の（B）後に（~~B~~）」 (82-1 #1 33'47")
アッ[タモン]ジャ（ナカ）
「あった（B）もんじゃ（~~B~~）」 (82-1 #2 15'46")

頭音節が短くHがA型・B型共に2音節目で実現する2音節文節は，後続の文節がない場合は，2音節目末尾の下降曲線の有無のみで型の弁別が実現する。後続する文節がある場合は，文節境界を越え次文節の冒頭で型の弁別（Lの有無）が見られる例がある。頻出する引用の助詞テは，アクセント単位として独立することができる助詞であり長いB型文節の後では低いピッチからの下降調となるが，短い2音節のB型文節に接続する例では，先行B型の語末から冒頭に高い上昇を伴い，上昇下降調で実現する。

(20) ハ[ウ([])}テ]]イーヨッ]タ
「（母さん）（A）と言っていた」 (82-1 #1 4'53" 他)
ク[エ{テ]]イーヨッ]タ
「（桶板材）（B）と言っていた」 (82-1 #1 20'09")
cf. ハ[ウ]ナン]ダア
「母（A）などは」 (82-1 #1 5'50")
ク[エデ}
「板材（B）で」 (82-1 #1 20'59")

4.2 永田方言

旧上屋久町北西部の集落である。テープは，全国方言資料と似た場面設定による方言会話の寸劇を録音している2本と90歳代の話者を中心とした座談を収録したもの4本がある。先行研究は，1音節の文節で型の弁別があること，短いA型2音節名詞で2音節目に下降調がある（L-HL）という点で一致している。これを声調配列にまとめる。

(21) 永田方言の語声調
A型：LHL+(f), LH}
B型：rL+HL}, LH{

A型では文節頭からの上昇調LHが観察され，冒頭短音節での上昇は，楠川方言のように2音節目がHに聞こえる実現形と宮之浦方言のように頭高に聞こえる実現形があり，同一の語で連続した談話の中で双方が聞かれる例もある。文節頭長

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

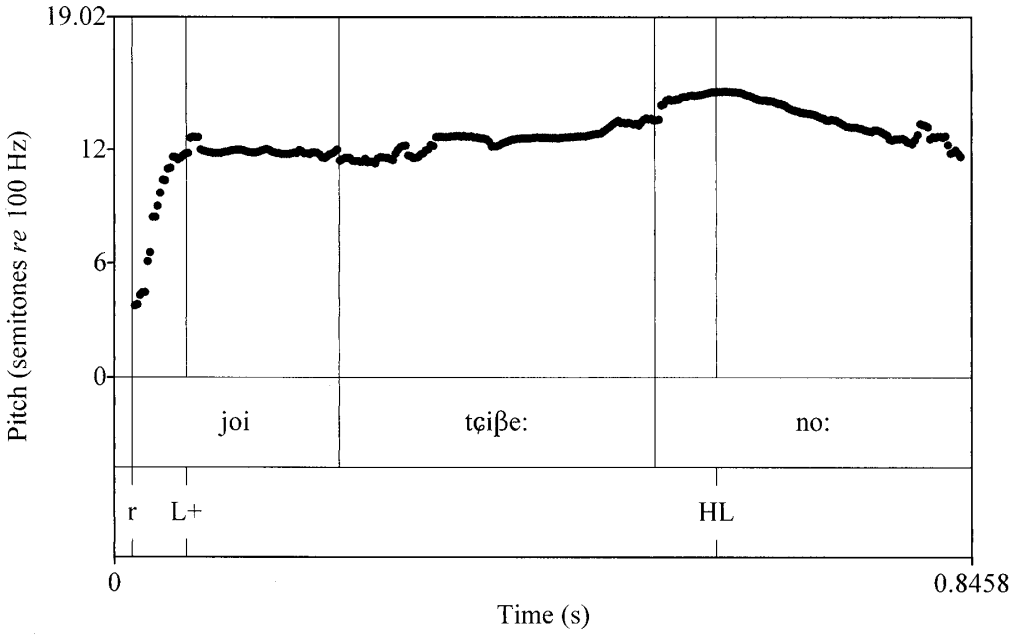

図 4（永田方言） [[ヨ[イチベー[ノ「与一兵衛の」82-5-2 #1 24'46"

音節ではこの音節内で上昇が終わる。長い A 型の文節末には通常は 2 段目の下降 f が現われる。長い B 型文節は末音節だけが高く聞こえ，先行研究の一音節卓立と一致する。ただし，文節頭に上昇があるため平進部分の L+ はピッチが上がって全体が高い。LH の上昇調は次末音節で開始されていることが多く，末音節ではこの H に後続した下降曲線が現れる。

B 型文節末のこの下降開始のタイミングによっては，文節末音節が先行音節より低く聞こえる場合がある（例　ア[ニキ[ワ 82-3-2 #1 10'21" ～ア[ニキ]ワ 82-3-2 #1 10'17"「兄貴は」オ[トート[ガ 82-3-1 #1 8'05" ～オ[トート]ガ 82-3-1 #1 8'59"「弟が」）。

長い B 型文節と後続する文節の間には境界声調 } が現れるが，主として短い B 型文節の後の境界声調として { が現れて，後続文節の冒頭音節が高く実現する例は音声資料に頻出する。この境界声調に続く B 型文節では冒頭音節のみが高い点で，「句切れ」があって弱化しない文節と区別できる。

(22) イ[カン{シェ]バ（82-2-2 #1 9'55" 他）～
　　イ[カン}シェ]バ　（82-2-1 #1 28'43" 他）
「どう（B）すれば（A）」
ド[コ{ヤッタトカ
「どこ（B）だったの（B）」
（82-2-1 #1 25'25" 他）
ハ[ヨー}モロッ[テ{コ]ニャー
「早く（B）戻って（B）こないと（B）」
（82-2-1 #1 23'13"）

4.3　安房里方言

屋久島南東部に位置する集落である。方言ライブラリ音声資料 83-10，83-11 の 2 本は二名の母語話者の対談である。同じ方言（安房）の記述とみられる上村（1966）では，A 型 2 音節文節で頭高となることが特徴的である。助詞を伴う 1 拍名詞がすべて A 型という記述には資料に反例がある。この方言の二型は次のように分析できる。

(23) 安房里方言の語声調
　A 型：LHL+(f){
　B 型：rL+H}

文節冒頭の LH は，3 音節以上の A 型文節では楠川方言と似た分布である。2 音節文節では，頭音節の長さにかかわらず頭高に聞こえるが，波形

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

の冒頭に上昇調がありLHが頭音節内部で実現していることがわかる。頭音節に促音をもつ2音節文節では，ピッチの上昇部が無声になるため，注意して聞くと2音節目の下降調が聞き取れる。

B型文節は，永田方言と同様な2段上昇と末音節の卓立がある。しかし永田方言のような文節末の下降はなく，言いきりでは高平調がしばしば観察される。B型文節末のLは少ないが例があり，楠川方言と同様，文節境界声調}の変異形であると解釈する。この場合は次末音節が卓立した高平調である。

(24) ゴ[ジューメグ[ライ]ニ}シ]テ
「五十匁ぐらいにして」 (83-10-1 #1 14'04")
ジ[ブン]デ[ネ
「自分でね」 (83-10-1 #1 14'58")
cf. ジ[ブン[デ（頻出）

A型文節末には，句切りなく次の文節に接続する場合に境界音調{が現れて，次文節の冒頭にわずかなピッチ上昇が観察される。この境界音調に先行して観察されるA型文節末の二次的な下降調fは，境界音調{の実現に付随するものと分析できる。

長い複合語が2アクセント単位として発話される例も多く，その場合，先行のA型文節末には境界声調{が現れるため，後続のL!Hに先行したピッチの谷が現れる。

(25) ム[ジョー]]ケン{コーフク
「無条件（A）降伏（B）」 (83-10-2 #1 19'23")
[[ジョー]リ]ク{スンゼン
「上陸（A）寸前（B）」 (83-10-2 #1 19'33")

4.4 尾之間方言

屋久島南部の集落である。方言ライブラリへの収録テープは8本で話し手も多数である。先行研究は，A型・B型とも記述の揺れがある。1音節名詞は型の弁別がなく助詞を伴う文節でA型側に統合する。資料でも，同一話者の発話の揺れと，1音節名詞のA型への統合が確認できる。特徴的なのは，A型文節のHLに後続するL+のピッチ形である。最初の大きな下降の後は，ほぼ平進となり，二次的な下降fがない。句切れのない後続文節があれば平進が続く。揺れを含む声調配列は，以下のようにまとめられる。

(26) 尾之間方言の語声調
A型：LH(+)L+
B型：LH+}

A型の冒頭での上昇調は短く，遅くとも2音節目の冒頭にはピークに達して維持され，長頭音節ではこの音節全体が高平調に聞こえる印象を与える。長い文節で文節頭の短い2音節が高く聞こえる点は宮之浦方言に似るが，長音節を含むときも2音節の高平調に聞こえる場合がある。さらに，H+が頭音節を含まない2音節以上にわたる発話もある。

(27) [[ヨンジュッ]チョーブ
「四十町歩」 (83-4-1 #1 7'48")
ト[ロバ]コ
「とろ箱」 (83-6-1 #1 11'44")
カ[ゴシ]マノ
「鹿児島の」 (83-5-2 #1 8'58")
ナ[ガタ]ニモ
「永田にも」 (83-5-2 #1 24'30")

同じ話者の同じ語の発話で揺れがみられる場合も，この種のH+の長さの揺れが多い。

(28) イッ[カイゴ]トニ (83-6-2 #1 24'37") ～
イッ[カイ]]ゴトニ（同 24'45"）
「一回毎に」
[[サンジガッ]コー (83-6-2 #1 16'20") ～
[[サン]ジガッコー （同 16'42"）
「三時学校」

尾之間方言では，A型文節末に境界声調を欠き，

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

2単位の連続かA型1単位への統合があるか判断がつかない場合がある。統合があると判断できる長い複合語の例を示す。

・後続するA型のHLが実現しない

(29) [[メー]ジジダイノ
「明治（A）時代の（~~A~~）」　(83-2 #1 5'50")
cf. [[メー]ジジダイ]]ノ
「明治（A）時代の（A）」　(83-5-2 #1 4'10")

・後続するB型とその後の文節の間の境界声調が実現しない

(30) コ[ク]リツコーエンニナッテ
「国立（A）公園に（~~B~~）なって（B）」
(83-2 #1 7'35")

つまり，A型文節とB型文節の連続では，さらにその後にB型文節の境界声調が実現するような環境でない限り，B型文節が独立したアクセント単位となっているかどうかが判断できないのである。尾之間方言でA型の語に接続する助詞が独立したアクセント単位を構成していないことも，他方言のような文節末を特徴付ける声調配列によるのではなく，上記のようなアクセント統合の判断基準によって推定できる。

4.5 栗生方言

旧屋久町西端の集落の方言である。同じ聞き手・司会による4本の資料のうち，83-9，83-12，83-13A面の話者が共通の2名，83-13B面，83-14が別の3名のものである。前者の1名はA型の長い文節で，屋久島諸方言に特徴的な冒頭部のHLが現れないため，この話者の発話は分析から除外する。先行研究によると，A型で頭高が現われないタイプであり，1音節名詞が型の弁別を失い助詞を伴う文節がB型となる点が特徴的である。声調配列は以下のようにまとめられるが，その配分に特徴がある。

(31) 栗生方言の語声調
A型：LHL+f, LH}
B型：L<H(L)}, LH{

A型の冒頭のLHは，頭音節が短い場合はしばしば後続音節との音節間での急激なピッチ上昇として実現する。Hが，短かい頭音節に続く位置では2音節目，有声の長い頭音節ではこの音節全体

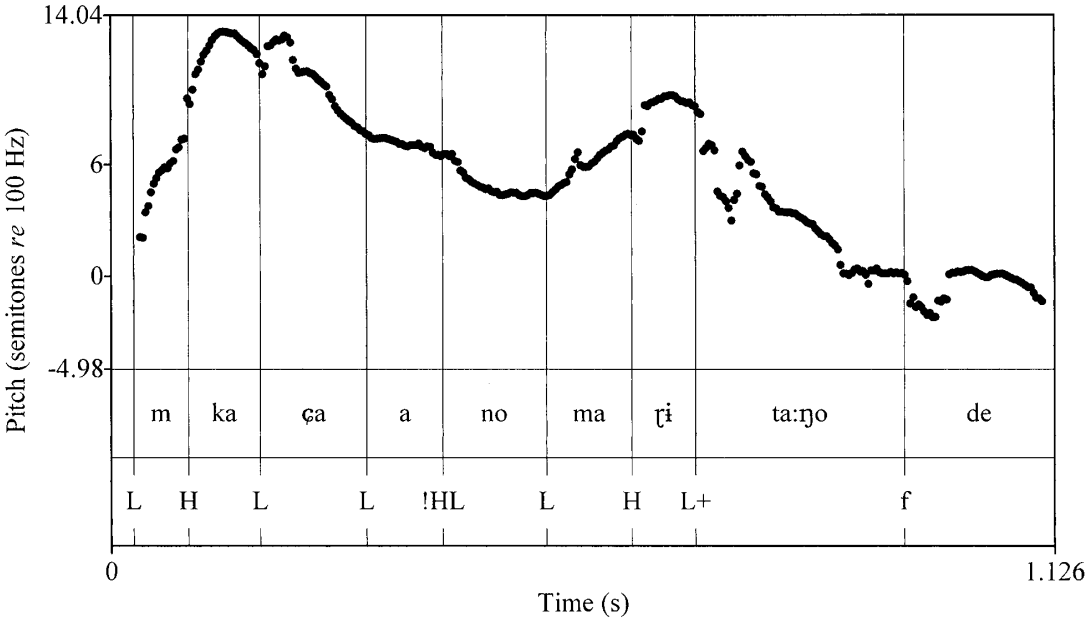

図5（栗生方言）　ム[カ]シャ]ア]ノ マ[ル]ターゴ]デ「昔はあの，丸たごで」83-12-B-44'14"

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

に，音節の長さに関わらず高平調の印象を与える程度に持続した後で，次音節との間で急激に下降する。冒頭部の1音節卓立が特徴的なピッチ形であり，長母音やこの位置で長母音化した短母音の高平調が他方言の下降調と比べて際立つ（ム[カー]シ]ノ「昔の」83-13-B-37'30" 他頻出など)。長いA型文節末には2段下降fが現れる。短い2音節のA型文節では，後続文節がなければ2音節目が下降調となるが，後続文節があれば2音節目が卓立して高平調となる。1音節名詞のB型への統合も，このHの持続の要求に関係付けられるかもしれない。

B型文節は語末音節にHをもつ多音節上昇調であり，かなり長い文節（例：ダゴトイジェンマノ]「雑魚取り伝馬の」83-14-A-34'29"）でも全体としての上昇が聞き取れる。また，末音節に大きなピッチ下降が現れて，末音節が低く聞こえる発話が短い文節でしばしばみられる（[[ダイ[ク]ガ「大工が」83-13-A-18'49" 他)。長い文節では，全体に音節が短くなるためか，後続する文節がない位置での下降は目立たない。

B型文節では，短2音節文節に限らず，次文節の頭音節冒頭までの上昇継続とそれに続く下降の例が比較的多くみられる。(例：ハンブン{ジャ]ネ「半分だね」83-14-B-3'46" ワリー{コ]トバカイ「悪い（B）ことばかり（B)」83-14-B-17'00")。

5. 結論

以上の各方言と宮之浦方言の分析は，以下のようにまとめることができる。

I. 6方言すべてが，文節アクセントである。

II. 尾之間方言を除く5方言は，A型文節は文節頭だけでなく文節末にも文節境界を示すような固有のピッチ形あるいは境界声調をもつ。

これらの特徴は，鹿児島県本土諸方言の二型アクセントと共通であり，尾之間方言の例外をこの方言での変化の結果であると考えれば，屋久島方言と鹿児島方言の共通祖語の特徴として，これらの性質を備えた方言を仮定することができる。

木部（2000）では，屋久島諸方言のA型の文節頭に現れるLHLが長崎方言やゴンザの方言と共通する点に着目して保守形とみなした。しかし，この形が屋久島での変化の結果生じたという考え方も可能であり，また，そう考えたほうが都合がよい事実もある。

・木部（2000）によれば，種子島方言では他方言のA型に対応する（I）型は文節頭に特徴的なピッチをもっておらず，一方，B型に対応する（II）型にLHLがある。後者が革新形であるならば，屋久島のA型のLHLも変化によって生じた可能性がある。

・鹿児島県本土方言にはA型・B型の双方にLHLをもつ重起伏型方言が分布する。

・屋久島で唯一の一型アクセントと報告されている平内方言は，文節末に特徴的なピッチ形をもつ型に統一されており，一型化する前にはA・B両型が共に文節末のみで弁別される方言であったと考えるほうが自然である。LHLがより古い形であるとすれば，A型でLHLを失う変化が鹿児島県本土・種子島・屋久島平内でそれぞれ個別に起きたと考えなければならない。

これらの点を考慮して，LHLのない以下のような祖形を立てる。

(32) 屋久島・種子島・鹿児島共通祖語

*LH+}（A型）/L+H}（B型）

→ *LH+L/L+H}

左側のピッチ形（早上がり / 遅上がり）で弁別され，文節末に境界声調をもつ音形である。A型は現在の種子島方言に残り，B型は鹿児島方言に残ると考えたが，この形では短い文節で弁別が困難な点を考慮すると，種子島や屋久島のB型に残存する境界声調{が祖語に遡る可能性もある。いずれにせよ，文節末に何らかの固定した声調があればよい。A型では境界声調による下降調が早まることにより，右側でも型の弁別に関与するピッチの違いが生じたと考える。この境界声調の早めは，その後屋久島でもB型で繰り

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

返された二型アクセントに起こりやすい変化であると考える。

(33) 鹿児島県本土[6)]

*LH+L/LH+}

→ L<HL/L<H} ～ H+Lf/H+(L)}（北薩）

*L+HL/L+H}

→ L+HL/L+H}（鹿児島）～（重起伏諸方言）

～ L+H}（諸県一型）

鹿児島県本土では，この右側のピッチ形が専ら型の弁別に関与し，左側は文節の境界表示のみに関わるピッチ形として統一されてA型・B型が共通に変化した。これに対して，屋久島と種子島では左側のピッチ形も型の弁別に関与した異なる音形を保ち，A型とB型で文節頭部が異なる変化を経る。文節頭のピッチ隆起（LHL）がA型のみで起きたのが屋久島，B型のみで起きたのが種子島であると考える。屋久島での変化は，地理的な位置関係を考慮し，Hが単なるピークではなく高平調音節卓立（H_で表記する）を起こすような長さをもつ南部の諸方言を，別の変化で生じたものと考えることにする。

(34) 屋久島主流

*LHL+f/rL+H} → LHL+f/rL+HL（永田）

→ LHL+f/L<HL（宮之浦）

→ LHL+f/LH+(L)}（楠川）

→ LHL+(f){/rL+H}（安房）

(35) 屋久島南部

*LH+L/LH+} → *LH+L →（平内一型）

? → *LH+L+/LH+}

→ LH_(+)L+/LH+}

（尾之間）

*LH+L/L<H} → LH_L+F/L<H(L)}（栗生）

? → *LH_L+/LH+}

→ LH_(+)L+/LH+}

（尾之間）

(36) 種子島

*LH+}/LHL+H} → LH+}/LHL+{

（種子島・南種子町島間小平山）[7)]

平内方言は，先行研究によれば，Hの位置が文節末音節または次末音節の間で揺れる音形をもつ一型アクセント（L<H(L) ～ L+H(L)）である。平内での型の弁別の喪失は，この地域でA型でLH_Lのピッチ隆起が起きる前であったと考えなければならない。一方，栗生のA型でLH_Lのピッチ隆起が起きた時点ではA型とB型は文節頭でも弁別があったはずである。尾之間の位置づけは多くの問題を孕む。この方言が栗生と共通にLH_L隆起を経ているとみるか，あるいは，単にA型末のLの音節数が増えたとみるかの判断は難しい。いずれの経路にせよ，A型L音節の増加がLの平進化と文節末境界表示の喪失を引き起こしたと考える。尾之間A型で文節末境界表示がない点を屋久島・種子島・鹿児島共通祖語より古い特徴の残存とすると，もっとも急進的な変化を起こした平内ともっとも保守的な尾之間が地理的に近いことの説明が必要になる。

以上のような変化を起こす前の屋久島・種子島・鹿児島共通祖語形が九州西南部の二型アクセント全体の形成過程にどう位置づけられるかは，九州北西部地域の二型アクセントやこれに隣接する一型（あるいは無型）のアクセントでのI，IIの特徴の分布が明らかにされることを待つ。全国方言資料に収録されている長崎県南高来郡有家町（現南島原市）の談話資料は，A型とB型とで文節頭のピッチ曲線が異なる二型アクセントであるが，A型の文節末は尾之間方言と似た平進である。このような方言は，屋久島・種子島・鹿児島共通祖語より古い段階で分岐している可能性がある。

〔付記〕

本稿は平成23年度科学研究費基盤研究（C）（課題番号2152041100）「韻律ラベリングのデータベース化のための曲線声調表示された韻律階層の日印対照」の研究成果に基づくものである。

NII-Electronic Library Service

Phonetic Society of Japan

〔注〕

1) アクセント表記は，本稿の語例のカナアクセント表記で補助的に用いた記号（音節間のピッチ上昇："["，下降："]"，次音節の上昇調："[["，先行音節の下降調"]]"）に改めた。助詞を▽で表記する。
2) 本稿では「アクセント句」という用語を用いない。「句」はすべて川上蓁氏の「句」を指している。
3) 宮之浦方言談話資料では「～どこいじゃなか」が肯定の強意表現として頻出する。B型との対応から，「～どこいじゃ」までが1文節と判断できる。
4) 2011年現在，来館での利用のみが可能である。研究用複写に関しては申請する。
5) 鹿児島方言については児玉望（2010b）参照。
6) 児玉望（2010a），児玉望（2012）で詳述。
7) 全国方言資料収録音声の分析に基づく。

参考文献

上野善道（1984）「N型アクセントの一般特性について」『現代方言学の課題　第2巻　記述的研究篇』167–209，明治書院.

上野善道（1992）「鹿児島県吹上町方言の複合名詞のアクセント」国広哲弥（編）『日本語イントネーションの実態と分析』91–208，文部省重点領域研究「日本語音声における韻律的特徴の実態とその教育に関する総合的研究」総括班.

上村孝二（1966）「屋久島方言の研究—音声の部」『鹿児島大学法文学部文学科論集』2, 35–60.

川上蓁（1984）「アクセント研究の問題点」『現代方言学の課題　第2巻　記述的研究篇』147–166，明治書院.

木部暢子（2000）『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版.

木部暢子（2003）「屋久島・尾之間方言の調査報告」佐藤亮一（編）『消滅する方言音韻の緊急調査研究』34–84，文部科学省特定領域研究「環太平洋の『消滅に瀕した言語』にかんする緊急調査研究」総括班.

金田一春彦（1954）「対馬附壱岐のアクセントの地位—九州諸方言のアクセントの対立はどうしてできたか」九学会連合対馬共同調査委員会『対馬の自然と文化』古今書院.

児玉望（2010a）「方言音声コーパスの韻律構造表示～鹿児島県立図書館方言採録テープの分析～」『熊本大学言語学論集』9, 1–28.

児玉望（2010b）「付属語のアクセント—鹿児島方言—」上野善道（監修）『日本語研究の12章』475–489，明治書院.

児玉望（2012）「甑島の二型アクセント—自発談話音声資料の分析」『熊本大学言語学論集』11, 47–68.

早田輝洋（1985）『博多方言のアクセント・形態論』九州大学出版会.

早田輝洋（1999）「東京アクセントのピッチ曲線」『音調のタイポロジー』265–275，大修館書店.（初出：『文研月報』20(8)）

平山輝男（1969）『薩南諸島の総合的研究』明治書院.

日本放送協会編（1981）『カセットテープ全国方言資料』第6巻　九州編，第9巻　辺地・離島編　III　九州，日本放送出版協会.（1959–1972年にソノシートで刊行，1999年CD-ROM化）

(Received Oct. 31, 2011, Accepted Apr. 16, 2012)

NII-Electronic Library Service